

とくくらしいになっています。こういうすべてのものと別れるということば、先生にとつては、どんなに悲しいことでしょう！二階では、先生の妹さんが荷造りをしていらつしやいますか、そのゆききする足音をきいて、先生は、きつと、胸のつぶれるような思いをされているでしょう。明日は、いよいよ出発です。永遠に、この土地を去らなければならぬのです。

それでも先生は勇気を出して、最後まで授業を続けられました。習字のつぎは、歴史の勉強でした。それから小さな生徒たちは、みんないっしょに読み方のけいこをはじめました。読本を両手にもって、生徒たちといっしょに文字をひろい読みしていました。いっしょけんめいなのがわかります。じいさんの声は、感激のわたしたちはみんな、笑いたくなり、泣きたくもなりました。

ああ、この最後の授業を、わたしは一生わすれることができせん……。とつぜん、教室の時計が十二時を打ちました。つづいてアソジエリユスの鐘がきこえてきました。それと同時に、訓練からもどるプロシヤ兵隊のラッパが窓の外からひびいてきました。アメル先生は、すつと教壇に立ちあげられました。頭は真つ青です。先生がこんなに大きく見えたことはありませんでした。

「みんなさん」と、先生は言いました。「みんなさん……わたしは……わたしは……。」

最後の授業

アルフオーズ・ボーデ

その朝は、学校へ行くのがたいへんおそくなったし、アメル先生から文法の質問をうると言われていたのに、わたしはなにも勉強していなかったのです。それから、学校を休んでどこかへ遊びにいこう、と考えました。空はよく晴れてあたたかでした。

森のなかでは、つぐみが鳴いていまし、リベールの原っぱからは、木びき工場のうしろでプロシヤの兵隊たちが訓練しているのがきこえます。森へいこうか、原っぱへいこうか、どれも、文法の規則よりはわたしの心をひきつけました。けれど、やっとこのゆうわくにうち勝って、いそいで学校へむかつてかけだしました。役場のそばをとおると、金網を張った小さな掲示板の前に、おおぜいの人たちが立ちまわっていました。二年ほどまえから敗戦とか、挑発とか、司令部の命令とかいふやないやなしらせは、みんな、ここにけ掲示されることになっていました。わたしは歩きながら考えました。

「こんどは、なんのしらせかしら？」

そして、小走りとおりすぎようとすると、そこで、弟子といっしょに掲示を読んでいたかじ屋のワシュテルさんが、大声でわたしに言いました。

「おい、ぼうや、そんなにいそがなくなっちゃっていいさ、どうせ学校にはおくれっこないんだから！」

かじ屋のおじさん、わたしをからかっているんだな、と思ったので、わたしは息をはずませて、学校の間をくぐりました。

いつもなら、授業のはじまりはたいへんなさわぎでした。つくえをばたばたあけたりしめたりする音や、日課を暗記しようと、耳を手でふさいで大声でくりかえしている声やら、「さ、すこし静かに！」と、じょうぎでつくえをたたきながら叫ぶ先生の声が往来まできこえていたものでした。

わたしは、みんながこうしてさわいでいれば、だれにも気づかれなくて、そっと自分の席につくことができるだろうと思いました。ところがその日は、なにもかもひっそりとして、まるで、日曜の朝のようでした。あいている窓ごしになかを見ると、クラスの者はみんな自分の席についていますし、アメル先生が、あのおそろしいじょうぎをかかえて、いったりきたりしていらっしゃいます。戸をあけて、この静まりかえったまっただなかに入らなければならないことを思う、なんだかはずかしいような、こわいような気がします。

本を用意しておいてくださいました。それには、まるみをおびた、きれいな字で、《フランス、アルゼス、フランス、アルゼス》と書いてありました。そのお手本はまるで、小さな旗がつくえのくぎにかかって、教室じゅうに、ひるがえっているように見えました。わたしたちは、いっしょうけんめいでした。みんな、しいんと静まりかえっています。ただ紙の上をペンの走る音がきこえるばかりです。とちゅうで一度窓からこがね虫が一匹き入ってきましたが、そんなものに気をとられる者は、ひとりもいません。村の人といっしょに、おさない子どもまでが、一心に紙の上に線を引いていました。まるでその線のひとすじひとすじが、フランスの言葉であるかのように、まじめに、心をこめて書いているのです。学校の屋根の上では、ハトが静かに鳴いていました。わたしはその声を聞いて、〈今に、ハトまで、ドイツ語で鳴かなければならないのじゃないかしら？〉と思いました。

ときどきページから目をあげて見ますと、アメル先生は教壇の上に立って、あたりを静かにながめていらっしゃいます。まるで、小さな校舎をみんな目のなかにおさめようとしていらっしゃるようです。むりもありません。四十年もの長い間、ここで、すこしもかわらないこの教室で、教えてきたのですもの。ただかわったのは、つくえやこしかけが、使われている間に、こすられ、つやが出てきたぐらいものです。庭のクラミの木は大きくなり、先生の手植えのヒイラギが、いまは窓の外に美しくげって、屋根までと

「あなたがおとうさんやおかあさんがたは、子どもた

ちが教育を受けることをあまりのぞまなかったのです。すこしでも金^{かね}になれば、というわけで、畑や工場にいかせたがりました。いえ、こういうわたし自身にも、責任^{せきにん}があります。勉強^{べんきやう}の時間に、あなたがたに花に水をやらせたこともあり、わたしがアユツりにいきたいために、あなたがたに休みをあたえたこともありました。」

それからアメル先生は、フランス語についてつぎからつぎへと話をなさいました。フランス語が世界でいちばん美しい、いちばんはつきりした、いちばん力強い言葉であることや、ある民族^{みんぞく}がどれいとも、その国語をもっているうちは、その牢獄^{らうごく}のかぎにぎっているようなものだから、わたしたちの間でフランス語をよく守りとおして、けっしてわすれないようにしなければならぬというお話でした。

それから、先生は、文法の本を開いて、今日のけいこのところをお読みになりました。わたしはあまりよくわかるので、びっくりしました。先生がおっしゃたことは、わたしには、たいへんやさしく思われました。わたしがこれほど注意してきいたことはじめてでしたし、先生がこれほどしんぼう強く説明されたことも、いままでありませんでした。先生は、この土地を去っていくまえに、知っていることをすっかり教えて、いっぺんにわたしたちの頭のなかへつめてまうとしていらっしやるように思われました。

ところが、大ちがいでした。アメル先生は、おこるどころか、わたしを見ると、やさしい口調^{くちやう}で、こう言われました。「フランスツカ。早く席につきなさい。もうこないのかと思つて、はじめるところだった。」

わたしは、すぐに席につきました。そして、おそろしさがおさまると、わたしは、先生が視学館^{しがくかん}のくる日とか、卒業式の日でなければ着ない、りっぱな緑色のフロックコート（上着^{うわぎ}丈の長い、男性用^{たんせいよう}の礼服^{れいふく}）を着て、こまかくひだをとった、はばのひろいネクタイをしめ、ししゅうをした、黒い絹^{きぬ}のふしなし帽をかぶつていらっしやるのに気がつきました。それに、教室全体に、なにかふしぎなおごそかさ

がみなぎっていました。いちばんおどろかされたのは、教室の後ろのほうの、いつもはあいている席とでした。三角帽^{さんかくぼう}をもったオゼールじいさんや、もとのざいじょう村長^{むらぢやう}さんや、郵便屋^{ゆうびんや}さんの顔もみえます。そのほかにも、おおぜいの人がいしましたが、みんな悲しそうでした。オゼールじいさんは、表紙のいたんだ古い読本^{とくほん}をもつてきていて、ひざの上にひろげ、大きなめがねをそのうえにおいていました。

わたしがいろいろのことについてびっくりしている間に、アメル先生は教壇^{きやうだん}にあがって、わたしをむかえたときと同じような、やさしい重みのある声で話されました。

「みなさん、わたしが授業をするのは、これが最後になりました。アルゼスとロレーヌの学校では、ドイツ語しか教えてはいけないという命令が、ベルリンからきたのです。新しい先生が、明日、おみえになります。今日はフランス語の最後の授業です。どうか、よく注意してきてください。」

わたしはびっくりしました。さっき役場に掲示してあったのは、このことだったのでしょうか。

ああ、フランス語の最後の授業！

それなのに、わたしはまだフランス語がやっと書けるくらいです。では、もう、習うことはできないのでしょうか。フランス語をもっと勉強することは、できなくなったのでしょうか。

ああ、どうしてわたしは、いままで教室で、あんなにぼんやりしていたのだろう。鳥の巣をさがしまわったり、氷すべりをするために学校をずるけたことを、自分ながらうらめしく思いました。さっきまで、あんなにじゃまだった文法の本や聖書などが、いまでは、別れたくないむかしなじみの友だちのように思われました。アメル先生にたいしても、同じような気持ちを感じました。先生はどこかへいってしまうのだ、もう会うことはできないのだ、と思うと、先生にしかられたり、じょうぎで打たれたことも、わすれてしまいました。

ああ、おきのどくな先生！

先生は、この最後の授業のために、着かざってこられたのでした。わたしは、なぜ村の老人たちが、教室にきて後ろのほうにすわっているのかが、わかりました。どうやら、この学校にあまりたびたびこなかったことをくやんでいるようです。

村の人たちは、また、先生の四十年ものあいだの苦勞を感謝し、かえっていかれる祖国にたいして敬意をあらわすためにきたのでしょうか……。

わたしが、こうしてじいっと考えこんでいるとき、とつぜん、わたしの名まえが呼ばれました。わたしの暗唱の番がきたのです。わたしは最初からまごついてしまって、立ったまま悲しい気持ちで、頭もあげられず、もじもじしていました。アメル先生の静かな声が、きこえてきました。

「フランツ、わたしはしかりません。自分でよくわかるでしょう。『いま勉強しなくても、勉強するときはじゅうぶんある。あした勉強しよう』などというのが、わたしたちの口ぐせでしたね。そしてそのため、どうなったかおわりでしょう。今日勉強にのぼす、これがアルゼスの大きな不幸だったのです。いま、ドイツ人たちに、こう言われてもしかたありません。『どうしたんだ、おまえたちはフランス人だと言いはっていた。それなのに、フランスの言葉を話すことも、書くことも、さっぱりできないじゃないか』。この点で、フランツ、あなたがいちばん悪いというわけではありません。わたしたちみんなが悪かったのです。みんなに責任があるのです。」